

小児甲状腺がんの原因は、事故直後のヨウ素 131 による初期被曝である。その被曝を正しく評価できるのは、尿や母乳などの放射能を測る方法で、通常「バイオアッセイ法」と呼ばれる。甲状腺に外から線量計を当てて測定する方法や、ホールボディ・カウンターによる測定は、バックグラウンドの影響を受けたり、セシウムの測定値から I-131 の推定をするなど間接的な方法で、正しい値は得られない。実は、福島原発事故後、国による母乳の I-131 の測定が行われたが、その評価結果を国は非公開にしたままである。しかし、その内容は驚くべきものだった。これがもし事実なら、福島の小児甲状腺がんは今後も更に増加し続けるだろう。

母乳からヨウ素 131 を検出

福島原発事故から間もない3月下旬に発足した市民団体「母乳調査・母子支援ネットワーク」は、いち早く母乳の検査をネット等で呼びかけ、4月中旬までに集めた母乳9検体のうち、4検体から6.4~36.3Bq/KgのI-131を検出し、結果を4月21日に厚労省記者クラブで公表した。政府は、母乳から放射能が出るとは予期していなかったらしく、母乳検査は行っていなかった。慌てた厚労省は、それから母乳を集め検査した。4月24日~25日に集めた23検体のうち、7検体からI-131を検出し、結果を4月30日に記者発表した。「検出レベルは2.3~8.0Bq/Kgと極めて低いので心配ない」という内容だった。しかしその裏では、具体的な被曝評価の計算が行われていた。国立放射線医学総合研究所は、ICRP（国際放射線防護委員会）の母乳に関するデータを基にモデルを構築し、母親がど

れだけI-131を摂取すれば、母乳にどれだけ出るかを計算した。同時に、その母乳を飲んだ乳児の被曝線量も計算した。その結果は驚くべきものだった（左下の表参照）。I-131の問題は、半減期が8日と短く、体内での移行がセシウムとは異なり、甲状腺に集まる点である。ICRPによれば、体内に入ったI-131の約半分は1日で尿に排出され、母乳には最大27%入る。それに半減期が加わる。時間が経てば検出は減るが初期被曝は大きい。

結果は非公開に

母乳中のI-131が数Bq/Kgでも、事故直後に母親が体内に取り込んだI-131は数十万Bqに及び。原因は、測定が体内摂取から1カ月後だったからである。その乳児の甲状腺被曝線量は300~1200mSvである。

この結果は、環境省の専門家会議で報告されただけで一般には公開されなかった。公表すれば世論を騒がせると判断したからと思

われる。

筆者は、偶然このデータを放医研の資料で入手した。

ここにも、事故直後の放射能測定が不十分だった影響が表れている。

今、「原発事故による被曝は少なく影響は小さい」というキャンペーンが盛んだが、被曝の影響はこれからである。

(2018年5月24日 河田)

被験者	母乳の I-131 (Bq/Kg)	母親の I-131 摂取量 (千 Bq/Kg)	母親の甲状腺被曝線量 (mSv)	乳児の甲状腺被曝線量 (mSv)
A	3.5	439	189	524
B	3	376	162	449
C	8	1,000	432	1,199
D	2.2	276	119	330
E	2.3	289	124	345
F	2.3	289	124	345
G	2.3	289	124	345